２０１５年度６月定例市議会終了に当たっての市議団長談話

２０１５年6月２６日

日本共産党広島市議会議員団

団長　中森辰一

改選後最初の定例広島市議会は、戦争法案ストップの運動が盛り上がる中で開かれた。

党市議団を代表して中森辰一議員が一般質問に立ち、当面の重要課題６項目について市の姿勢を質した。

まず戦争法案に対する平和都市ヒロシマの市長としての立場を問うた。しかし、世界恒久平和を訴えてきた立場がありながら、市長が答弁に立つことはなく、市民局長の、国会の議論を見守る、程度の答弁にとどまった。きわめて残念なことであり、世界平和をリードしようという意欲に欠ける態度だと言わねばならない。

重大事態になっているかき船「かなわ」の元安橋近くに移転する問題は、相変わらず「法令に違反していない」という答弁の繰り返しであったが、世界に２つしかない「負の遺産」を踏まえた検討が一切なかったことが明らかになった。国内の法令さえクリアすればいいという態度は、世界遺産を保全するべき市行政の姿勢としてきわめて遺憾だといわねばならない。今後も、市の姿勢は追求していく。

広島市が一番遅れている子どもの医療費補助制度の対象年齢を広げる問題では、その必要性は確認され、拡充方策を検討し、まとまれば具体的な提案を行うというところにとどまった。今後も早急な年齢引き上げに向け追及していく。

放課後児童クラブの待機児の問題は補正予算で対応方策が出されたが、解決は来年の年明けまでかかるという点で、市教育委員会の責任は重い。当面の夏休み対策も早急にとらせる取り組みを進める。

土石流災害被災者への対応の問題は、市の行政責任はないかのような態度であり、そこから被災住民置き去りの復興計画が出てきている。改めて市行政の被災についてと、これからについての責任を追及しながら、被災者本位の復興が進むよう取り組んでいく。

五日市にある３ヶ所の学校給食センターを廃止して１２０００食の給食工場に変え、民設民営方式を導入する問題は、中止を求める請願も出された。子どもの分野でコスト削減を追求するのは教育行政のあるべき姿勢ではない。教育現場では常に、一人ひとりの子どもを中心において、より丁寧に目を行き届かせることができる体制が必要であり、それが実現できる自校調理方式をあくまで要求していく。

本会議での議案質疑は、中原議員が党市議団を代表して行った。

質疑の内容は、補正予算案に関して「住宅団地の活性化」「民生委員・児童委員の負担軽減」「団地のゴミボックス」「まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定」「高速５号線関連買収費」についてである。

補正予算案のほとんどは、市民生活向上に役立つことだと考えるが、危険で無用の高速道路５号線を建設しようとする流れの中で、安全対策を標榜して計画されているトンネル直上の住宅地を買収する予算は問題である。トンネルをつくれば交通路としての危険性以上に、二葉山の地下水位が下がり、周辺の団地などに土石流災害が発生するなどの危険が指摘されているが、その点の解明は行われていない。そもそも造ってはならないトンネル建設を前提にした買収予算は認められないため、議案提案権を使ってその予算を削除する修正案を提出した。提案は否決されたが、今後も高速５号線建設阻止のために力を尽くしていく。

今議会には、１０件の請願が出されたが、その内、党市議団は７件の請願の紹介議員となり、それぞれ付託された常任委員会で市民の要望実現に向け奮闘した。

各常任委員会では、市民の暮らしと権利を守る立場から、議案への質疑と独自のテーマを持ってそれぞれ議論を行った。かき船移転に関わって、世界遺産のバッファーゾーンを守るために、３つの常任委員会で取り上げた。また関連して、元安橋のたもとに設置されているオープンカフェの問題も取り上げた。今後も引き続き問題にしていく。

戦争法案について、慎重審議を求める意見書案が出された。党市議団は、憲法違反の法案は撤回すべきとの意見を述べた上で賛成した。しかし、残念ながら賛成少数で否決された。世論は多数が法案に反対し、今国会での成立に反対する世論が８割を越える中で、世論と市議会議員とでは意識がかけ離れていることが明らかになった。

今議会の冒頭で、市長の所信表明演説が行われたが、政府が進める「地方創生」の流れに沿って施策を進める考えが表明された。広島市を中心に「２００万人広島都市圏構想」を実現したいとし、そのために「市域を超えての費用負担もいとわず」としていることは問題である。また街づくりを進めるにあたって「広く市民と対話し」と述べている。

復興ビジョンにしろ、かき船問題にしろ、高速道路５号線問題にしろ、これまで「対話」などなかったからこそ、厳しい批判が起きている。今後、ひとつひとつの施策を詳細に点検し、市政のあり方を本来の市民の声を反映したものに転換するため奮闘していく。